

学びをともに進めるオンライン実践の提案

—子どもを真ん中に全職員で進化し続ける学校を目指して—

高田実里（熊本大学教育学部附属小学校）

概要：本稿は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため政府方針に基づいた2020年4月1日～5月29日の休校期間に、熊本大学教育学部附属小学校（以下、本校）において行った取組をまとめたものである。刻々と変化する状況の中で、感染リスクを最小限に抑える取組を行いながらも、「子どもたちの学びは止まらない」という立場に立ち、全職員で子どもたちの生活や学びについて考え、我々教職員も試行錯誤しながらあらゆることに対して工夫を重ねた。今後、新たに休校期間がある場合の備忘録として、また、学校再開後の学び方への新たなアプローチの知見として、そして、本校におけるエビデンスを広く地域や全国の学校で活用していただけたらとの思いをこめて報告する。

キーワード：家庭と学校の繋がり、オンライン実践、タブレット端末、ロイロノートスクール

1 はじめに

本校では、休校措置以前からタブレット端末やPCを活用した学習実践を行ってきたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のための休校期間に、オンラインでの取組についても試行錯誤を繰り返した。その際、次のことを大切にしながら取組を行った。①子どもたちの安全と安心を確保すること、②休校期間終了後、学校での学習や生活をスムーズに行っていくために家庭学習の充実を図ること、③保護者への過度な負担がないようにすること（時間、金銭など）、④ICT機器を用いて教師間の情報共有についても、密を避けて進めること。

未知の状況の中でも、本校の組織体制を最大限に活かして、アンケート等を通して子どもや保護者の声を聴きながら対応を考え、教職員間でも状況を共有した。オンラインでの朝の会、オンデマンド型の教科学習の実践を中心に、取り組む中で見えてきた成果や課題について整理したい。

2 取組の実践

（1）対象および時期

本校児童648人を対象に、4月中旬から5

月末まで、オンライン（双方向型とオンデマンド型の併用）による学級活動や学習支援を行った。

（2）取組の方法と分析方法

同時双方向型の学級活動は、主に高学年において行い、テレビ会議システムZoomを活用して朝の会を行った。但し、朝の健康観察については、養護教諭による協力のもと、全ての学年で取り組み、担任とのコミュニケーションツールとしても活用した。

また、オンデマンドによる学習支援では、YouTubeとロイロノートを用いて家庭学習用の動画配信を行った。さらに、子どものノートや制作物を、ロイロノートを通して確認したり、コメントを返したりすることで、時間差はあるものの、双方向のやりとりを行った。

各学年の取組の記録および子どもと保護者から得られたアンケートの内容やインフォーマルなコメントの内容を分析した。

（3）本校および各家庭のICT環境整備

本校は、4月当初の段階で以下の表に示すタブレット端末及び大型ディスプレイ、校内Wi-fiが整備された環境にあった。

表1 本校のICT環境（2020年4月）

No.	ICT機器	台数	備考
1	Apple社製タブレット端末 iPad (LTEモデル) 児童用	144	
2	Apple社製タブレット端末 iPad (LTEモデル) 教師用	25	
3	Apple社製タブレット端末 iPad (Wi-Fiモデル)	46	
4	大型ディスプレイ	17	各学年2台 特別教室各1台
5	校内Wi-Fi	全館整備済	

各家庭のICT環境についても全家庭に調査を行った。その結果を以下2つの図に示す。

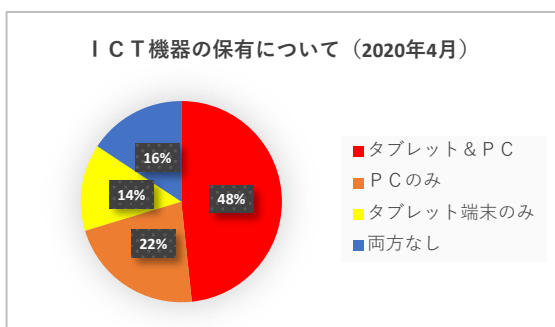


図1 家庭のICT環境（2020年4月）

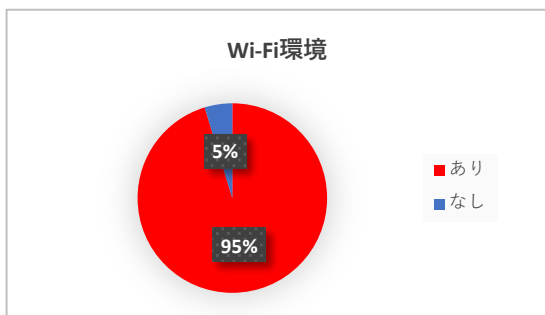


図2 家庭のWi-Fi環境（2020年4月）

きょうだい関係で家庭にある端末を同時に使用することが困難な家庭もあったが、本校にあるタブレット端末（LTEモデル、Wi-Fiモデル）等を貸し出すことで、全ての子どもたちにオンラインを用いた学習環境を提供することが可能であると確認できた。

タブレット端末1台、ACアダプタ1台、電源ケーブル1本をセットにして学年毎に分け、体育館にて日程を設定した上で4月21日の保護者による学習用具引き取り時

に貸し出した。

（4）取組の概要と学校再開までの経過

ここでは、オンラインでの取組に関連する本校での取組の概要と経過について紹介する。

表2 取組の概要と学校再開までの経過

日付	内容
4月8日	始業式（分散登校） オンライン授業の計画に伴う家庭のインターネット環境についてアンケート回答依頼
4月9日	始業式（分散登校） 3年と5年を実証学級として、Zoomを用いた授業を試験実施する準備を開始。
4月10日	入学式（1年生のみ）短縮した形で実施 午後からロイロノートの使い方とYouTube動画の作成方法について研修
4月13日	分散登校日① Zoomを用いた実証授業学級にタブレット端末を貸与課題の配付、学習計画表の作成、休校中の過ごし方の指導を行う。 YouTube動画とロイロノートを組み合わせた家庭学習の方法について児童に説明
4月14日	分散登校日① 2クラスにて双方向テレビ会議システムを活用した試験授業を実施① ロイロノートの使い方に関する動画をYouTubeにて保護者向けに配信
4月15日	休校中の家庭学習に必要なタブレット端末等の貸出希望調査についてメールにて通知
4月16日	統合アプリ Teams、双方向テレビ会議システム Zoom の研修を実施 2クラスにて双方向テレビ会議システムを活用した試験授業を実施②
4月17日	双方向テレビ会議システムを用いたPTA執行部の会議を毎週金曜日に定例実施 ICT端末機器環境アンケート調査を実施 2クラスにて双方向テレビ会議システムを活用した試験授業を実施③ YouTubeの動画配信とロイロノートを用いた提出を組み合わせ家庭学習を行うことを決定 タブレット端末貸出対象の家庭に担任が電話にて通知
4月21日	学習物・学習用具の引き取り（各教室にて） 体育館にて本校タブレットの貸出を実施
4月22日	健康観察（ロイロノート）とYouTubeの動画配信（1日3～4本）による家庭学習開始 週1～2回を目処にした職員の在宅勤務を開始
4月23日	臨時休業期間の延長（5/31まで）をメールにて通知
4月27日	ウェブアンケート機能を用いた健康観察・ICT活用状況調査を実施①
5月11日	ウェブアンケート機能を用いた健康観察・ICT活用状況調査を実施②
5月18日	ウェブアンケート機能を用いた健康観察・ICT活用状況調査を実施③
5月25日	ウェブアンケート機能を用いた健康観察・ICT活用状況調査を実施④

	況調査を実施④
5月26日	登校日① 給食なし(分散登校)
5月28日	登校日② 給食なし(分散登校)
6月1日 ～	9時までの遅延登校(4時間授業 給食あり) 学活を中心とした授業を開始

本校の校務分掌は部会制になっており、教務部、研究部、実習部、校務部、生活指導部、体育保健部で構成されている。校内研修については主に、研究部と校務部が主導し、ICT 機器の整備・貸与準備については、校務部の主導のもと、他の部と分担しながら進めた。

3 YouTube の動画配信とロイロノートを用いたオンラインを活用した学習の具体

(1) 第5学年部の取組

筆者が担任する第5学年部の取組について、その具体を紹介する。

表3 教師間における担当教科等の割り振

担任学級	担当した教科・領域
1組	国語科・総合的な学習の時間
2組(筆者)	外国語科・図工科・体育科
3組	社会・算数
理科専科	理科
家庭科専科	家庭科
音楽専科	音楽科

上の表のように、担任だけでなく、本校の全教員が連携・協力して YouTube を用いた授業の動画配信を行った。各動画は10分前後として、児童の負担感に配慮した。児童は視聴後、ノートやシートに記録したり、家庭において実習等を行ったりしながら学習を進めた。

動画を作成するに当たり、一方的に教師が指導内容を教え込む内容ではなく、子どもが自分なりの考えをノートに書く時間を確保したり、動画に合わせて音読を行ったり、実際の自然を観察したり、演奏を一緒に行ったりするなど、動画の機能的な特性を活かした学びに取り組むことができるようにした。

動画内で提出を指示された学習成果物は、カメラで撮影し、ロイロノートにより担当教諭に提出するようにした。単に提出させるだけでなく、教師からコメントやメッセージカードを返

信したり、友だち同士で学習の制作物を共有し、よさを認め合ったりする活動を組んだ。

(2) 外国語科のオンライン学習



図4 YouTube で配信された動画を見る子ども

5年生の外国語科は、通常時の授業を同様に週2コマの動画配信を行った。それぞれの動画は、他教科同様10分前後として、子どもが楽しみながら視聴でき、一緒に話を聴いたり話し

表1 配信した動画の本数

たりすることができる内容のものを作成した。



図5 外国語科の配信動画の例

扱った単元は、Unit 1, 2の自己紹介を含む表現とした。5年生となり、クラス替えを経験した子どもたちであったため、新しい友だちと仲良くなりたいという思いから、「学校再開後に早くオンラインで学んだ表現を使って、友だちとやりとりしたい。」といった感想がノートに記述された。ALT や赴任してきたばかりの教

論に動画に登場してもらい、子どもたちに向けて英語で語りかけてもらったことで、英語を聞く必然性を高めた。

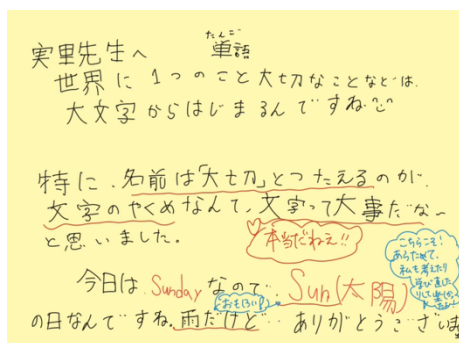


図6 子どもとのメッセージのやりとり

上の図のように、気付きや疑問をカードでやりとりし、そこで表出した内容を動画に改めて活かすようにした。

4 結論

ここでは、本取組を通して、情報収集した子どもの様子や保護者からのアンケート等をもとに、主に成果について示す。

(1) 子どもたちの様子から

休校当初は、漢字や計算などのドリル学習が中心であったが、日々の学びを進めていくという考えで動画配信とロイロノートを組み合わせた学習スタイルを確立したことで、家庭であっても規則正しい生活と学習リズムの定着が図られたという声が多く寄せられた。また、動画で出された課題をもとに、自分なりに学習を発展させて調べたり、考えたりする時間をじっくりと設けることができたので、自己調整的かつ粘り強く学びに取り組む子どもの姿が見られた。

理科や社会、生活科、音楽、図工などでは、実際に植物を育てたり、鍵盤ハーモニカで演奏したりするなどの実技的な内容も取り組めるようにし、成果物として提出させたことで、家庭で過ごす時間が長いからこそ、時間をかけて取り組むことができたものが多くあった。

担当教諭から送られてくる動画は、繰り返し視聴することができるため、「学校での授業では聞き逃してしまいそうなことを何度も確かめ

られて理解につながった。」との声もあった。

(2) 保護者の声から

休校期間が長くなり、保護者から不安の声も多くなる時期もあったが、「タブレットでの学習に慣れて、一人でもスムーズに取り掛かるようになった。授業動画、ありがとうございます。」といったコメントが多く寄せられた。

(3) 教職員の認識

休校中でも少しずつでも子どもたちの学びが進められるようにと動画配信を始めたが、結果的に全体の70%~80%の授業内容を終えている単元もあり、再開後の学習に対しても十分にリカバーできる状況をつくり出すことができた。

さらに、このような状況下だからこそ、各家庭の環境の中で、子どもたちとよりよい学びを生み出せるかを考える契機となり、授業デザインを考え直す機会となった。

5 今後の課題

学校再開後、対面による授業において、子どもたちとの体温を感じるやりとりを実感している部分は否めない。しかし、休校という状況下のオンラインによる取組においても、子どもを常に真ん中に、学校、家庭、PTAとタッグを組んで試行錯誤の中進んできたことで、場面や状況に応じた授業デザインの見直し、子どもだけでなく、教職員の情報活用能力の向上等、今後も継続的に取り組むべき方向性が見えたと考えられる。

参考文献

石井英真 (2020) 授業づくりの深め方-「よい授業」をデザインするための5つのツボ-。ミネルヴァ書房、京都、pp. 216-224

参考資料

松山明道 (2020) 子どもを学びをともに進める休校期間中にこそ全職員で進化する学校を目指して。熊本大学教育学部附属小学校